

モニタリングシート（院・国文学専攻）

No.	モニタリング項目	モニタリングデータ	継続事項	課題	次へのアクション
1	前年度の向上・改善施策の実施状況（成果・課題・継続事項）はどのような状況であるか。	点検・評価課題に対する向上・改善施策	国文学科の上に国文学専攻が載る現行の組織は学部と院との繋がりに関して外部からも分かりやすい形である。三専攻連携については学部改組を前提として話し合いが持たれたが、改組が御破算となった。	学部と大学院の教育内容の繋がりに関して、教員組織の問題としては単年度で対応できることではないが、今後、全専任教員の指導を受けられる体制について検討を行う。	より多くの大学院生を迎えるために、大学院入試の広報活動を充実させる。
2	定員充足の状況はどのような状況か。	定員充足率データ	2022年度入試は、博士前期に合格者1名、博士後期には志願者がいなかった。2023年度入試では博士前期・後期とも合格者各1名であった。志願者数の低迷が続いている。	定員未充足の状態が続いている。これまで教員志望の学生に対して、専修免許状取得のために大学院に進学する道もあるということをポータルや教職面談に於いて情報提供をしてきたが、定員未充足の状況は変わっていない。今後もこうした試みを継続すると共に、情報の有効な発信方法をさらに模索する必要がある。	大学院進学説明会の開催などにより、学部生に対して大学院の魅力を発信する機会を増やす。
3	DP・CPと関連したカリキュラムが適切に設計されているか。	履修要項等の各種データ	特になし	特になし	特になし
4	DPに沿って設定された各学位プログラムレベルにおけるカリキュラムについて、適切に実施されているか。	・履修状況等の各種データ ・大学院アンケート結果	大学院アンケート結果で専攻毎の結果を把握することはできないが、学科会議等の際に教員相互の情報共有に努めており、各院生が数名の教員担当授業を履修しているため自ずから履修状況が共有されており、カリキュラムは各授業において適切に実施されていると思われる。	現在の各授業の質を引き続き維持することが必要である。また、教員相互の情報共有を継続する。	特になし

No.	モニタリング項目	モニタリングデータ	継続事項	課題	次へのアクション
5	学修成果の到達度の把握はどのようおこなっているか。	学修成果の把握の取り組み等 大学院アンケート結果	博士前期課程に於いては毎年10月に修論の中間発表会を行っており、大学院の担当教員のみならず学科教員全体が参加し指導を行っている。院生・研修者あるいは学部生も参加し、発表者に対するのみならず教育の場としても機能している。	毎年優秀論文発表会を5月に開催し、卒論に加え修論の発表も行い、学修成果の可視化に取り組んでいる。同時に、大学院と学部との繋がりを意識する機会としても有用に機能しているので、今後も継続して行う。	特になし
6	各科目の成績および論文・研究が適切に評価されているか。	・成績評価に関する取り組み等 ・大学院アンケート結果	修士論文の試問は3人以上の教員で行っており、適確・公正な評価と報告がなされている。また、本学学会誌『女子大国文』、大学院の紀要『国文論藻』に院生の論文が掲載されることがあり、成果の可視化が為されている。	大学院アンケート結果で専攻毎の結果を把握することはできないが、大学院の授業は専門性が高く担当教員による評価に拠ることを基本としつつ、教員間の情報相互共有にこれからも留意する。	院生・研修者に対して、学会誌・紀要への論文の投稿を促す。
7	職位構成・年齢構成のバランス、非常勤比率に留意し、かつカリキュラムに基づく教員組織となっているか。	・所属教員の状況 ・科目群別非常勤比率	大学院担当専任教員8名のうち、7名が教授、1名が准教授。年齢は60代が5名と多く、やや片寄りが見られる。男女比は男性5名女性3名である。カリキュラムにおける非常勤の配置は各分野の整合性に照らして適切である。非常勤比率は他専攻に比べ高いが、学生数の少なさから非開講の科目も多い。	単年度の問題ではないが担当教員組織については今後、片寄りを少なくする方向で対処して行く。非常勤比率の高さについては学生の不利益が生じない形での対処を検討する。	教員組織の片寄り解消に向けて、准教授の大学院担当を順次進める。また非常勤比率に関して、教員間で情報を共有し中長期的検討を行う。
8	課題認識および外部環境を踏まえた独自のFD活動を実施できているか。	・FDの取り組み状況 ・前年度点検シート ・点検・評価課題に対する向上・改善施策	修論中間発表会・優秀論文発表会に於いて教員間で指導内容・方法の相互理解・確認が図られている。学会誌・大学院紀要に論文を掲載することで研究成果の評価が行われている。	本学図書館所蔵の「吉澤文庫」の調査・研究を専攻教員共同で行うことで、教員の研究能力の向上を図り、大学院での教育・研究指導に活かす。	「吉澤文庫」の共同調査を継続し、善本解題目録の作成を目指す。同じく、他の本学所蔵貴重資料の調査・研究を積極的に行なう。調査・研究・授業それぞれの場で学生の基礎学力の養成にいかに関与しているかを検証する。
9	上記以外で「継続すること」「課題」「次へのアクション」「全学レベルで検討すべき事項(提案)」があれば入力。	・各種データ	特になし	特になし	特になし